



高校地理における地域調査の单元構成：神戸市北区 唐櫃団地を事例として

石川，照子

(Citation)

兵庫地理, 46:30-38

(Issue Date)

2001-03-31

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002433>



高校地理における地域調査の単元構成

—神戸市北区唐櫃団地を事例として—

石川照子

1. 問題の所在

平成 11 年に高等学校学習指導要領の改訂がおこなわれ、15 年度入学生から適用される。教育課程審議会の答申の中で、社会科全体及び高等学校地理歴史科・公民科について「学び方や調べ方の学習、作業的、体験的な学習や問題解決的な学習など児童生徒の主体的な学習を一層重視する」と示された。そして高等学校学習指導要領によると、地理 B においては「直接調査できる地域の特色を多面的、多角的に調査」するようになっている。同時に「総合的な学習」もはじまる。これらを受けて、これまではあまり実施されてこなかった校外での調査活動が、今後は授業に組み入れられていくことが予想される。

しかし、これまで高校における地域調査の実践例はほとんどなく、なにより教師自身に地域調査の経験がない。そのような状況で「校外での調査活動」という学習形態のみが注目を集め、十分な指導計画を持たないまま実施に移されることに危惧を感じる。これはまた筆者自身の反省でもある。

それでは、生徒たちが小・中学校において経験してきた、地域調査の質的發展を高校でめざすには、どのような視点が必要であろうか。いいかえれば、高校地理という科目における地域調査では、何を、何のために、どのように調査すればよいのだろうか。

本報告では、まず 1999 年の 1 学期に実施した高校地理での地域調査の実践報告をおこなう。続いてこの授業実践の意義と課題を明らかにする。最後にこれらの問題を改善した新たな単元を提案することで、先の問いへの回答の試みとしたい。

2. 実践記録

1) 単元構想の契機—1 枚の写真

1998 年秋、神戸新聞に建設途中の唐櫃団地の航空写真が掲載された(写真 1)。それは新しい住宅群が、見事な棚田と隣り合わせて並ぶ写真であった。1966 年から入居が始まったこの唐櫃団地は、六甲山の北側、神戸市北区に立地し、神戸市、神戸電鉄、住友商事によって開発された総面積 50ha あまりの小規模な団地である。棚田を造成して開発された唐



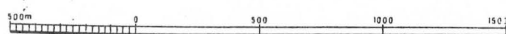
写真 1 昭和 44 年(1969)の唐櫃団地(神戸新聞社提供)



開発前



現在



4

第1図 開発前と現在の唐櫃団地付近
(2万5千分の1地形図「有馬」、昭和30年、平成10年発行)

櫃台 1～4 丁目の人口は、現在 3600 人余りである。新聞の写真を見て以来、この唐櫃団地にある兵庫県立神戸北高等学校に勤務していた筆者は、棚田が団地へと変貌する過程を生徒とともに調査する単元を構想し、翌年、1 学期間（全 28 時間）にわたる地域調査の授業を実施した。

2) 単元の概要－28 時間の地域調査

単元は大きく 3 段階に分けられる。

<導入部>

- ・調査の目的
- ・地域調査のさまざまな方法

<展開部>唐櫃団地の成立過程と日本の宅地開発

- ・航空写真と地形図（第 1 図）で比較する開発前後の唐櫃団地
- ・フィールドワーク（3 回）
- ・神戸市の住宅開発の歴史と唐櫃団地
- ・日本の住宅開発の社会的背景

<終結部>唐櫃団地の抱える問題

- ・住民アンケート

- ・統計にみる唐櫃団地の人口構成の変化
- ・これからの唐櫃団地

授業の最終段階では、調査結果を文化祭で展示した。また、授業で配布した資料や調査の記録を自分で製本する作業をおこなった。

これら一連の授業のうち、本報告の中心テーマであるフィールドワークと住民アンケートについて詳しく紹介する。

3) フィールドワーク－校外へ出かけよう

フィールドワークは全部で 3 回実施した。各回の調査の概要については第 1 表に示す。調査対象・方法を変えて段階的に設定することで、最終的には生徒たち自身でフィールドワークを企画できるように構成した。

1 回目は、団地内に棚田時代の痕跡を探した。高校の正門を出たところ、小学校の隣に小さな鎮守の杜「布土の森」がある。この小さな森は、開発以前の 1963 年撮影の航空写真でも、棚田のほぼ中央部に確認することができる。森の中には、石製の小さな構造物がある。これは唐櫃石神社で、神功皇后が甲冑と

第 1 表 フィールドワークの概要

	調査対象	学 習 活 動	学 習 内 容
1 回目	唐櫃団地	・教師があらかじめ設定したコースを全員でまわる。 ・解説は教師がおこなう。	・よく見ると団地の中にも、棚田の痕跡が残っている。 ・布土の森は開発前からあった。
2 回目	下唐櫃 (古い集落)	・案内者と教師が設定したコースを全員でまわる。 ・解説は地元の方をお願いする。	・田んぼが多い。 ・集落内の道は曲がりくねった細い道である。 ・寺、神社、水車小屋跡がある。
3 回目	団地内の諸施設（小・中学校、保育所、地域福祉センター、商店、交番など）	・グループごとに訪問先を設定する。 ・諸施設への聞き取りは、事前連絡を含め生徒のみで実施する。	・小・中学校の児童・生徒数が減少傾向にある。 ・高齢者の単身世帯が多い。 ・駅前商店街に活気がない。 ・路上駐車が多い。

ともに、黄金の雄鶏と雌鶏を石櫃に納め、この地に埋めたという伝説が残る。

唐櫃台1丁目の住宅地の中には、かつての棚田の一部が残っている場所がある。現在は畑として利用されており、段々の石積みが見える。1丁目の端まで来ると、急な下り坂になる。下りきると、奥山川に架かる下の川橋に至る。この橋を渡ると、下唐櫃とよばれる古い集落である。

この日は時間の関係で、もと来た坂を今度は登り、高校のグラウンド裏に出る。このままフェンスに沿って歩くと、4丁目と高校の間の杉木立に囲まれた空き地に出る。近寄ってみてはじめて墓地であることがわかる。昭和50年代のはじめ頃まで埋め墓として使われていたということで、今もよく手入れがされている。

実はこの空き地（墓地）は教室の窓からよく見える場所である。このように、これまで何気なく見ていた団地の風景は、「ここが棚田を開発して造られた住宅地である」という新たな視点を持つことで、違って見えてきた。いいかえれば、古くから、ここを自分たちの生活の場としてきた人たちの存在に気づいたのである。

2度目のフィールドワークでは、先日訪れた下の川橋を渡り、かつての棚田の所有者らが住む下唐櫃地区を歩いた。団地からわずか10分足らずで田園風景が広がる。案内は以前講師として授業に参加してもらった、神戸下唐櫃林産協同組合の組合長の新井氏である。新井氏は、高校の敷地内にあった田んぼの所有者で、授業の時には団地造成の頃の話や、昔の唐櫃村は農地は狭いが、そのかわりに林業が盛んであった話などしてもらった。

この日は専念寺、下唐櫃山王神社、水車小屋跡をまわった。昭和のはじめまでは、この村の水車で精米した酒米を牛の背に寄せ、六甲山を越え灘まで運んでいた話もきいた。

3回目は、前の2回とは異なり、生徒たち

自身で調査先を選び、グループごとに放課後を利用して団地内の諸施設の聞き取り調査をおこなった。この聞き取り調査の中で、小・中学校での児童・生徒数の減少や、高齢者の単身世帯増加など、地域社会の状況についての情報が集まり、これが住民アンケート調査の実施に発展していった。

教師はこれらのフィールドワーク実施にあたり、事前調査、案内者との打ち合わせ、調査先への協力依頼などの準備をおこなった。

4) アンケート調査ー地域住民との出会い

唐櫃団地の地域社会がかかえる問題を直接住民から聞くために、アンケートを実施することにした。質問内容は2時間かけて生徒たちが作成した。主な質問項目は唐櫃団地の住みやすさ、居住年数、家族数、買い物の行き先などである。アンケートは授業時間中、神戸電鉄唐櫃駅前において、対面方式で実施した。また、これとは別に老友会、婦人会の協力も得ることができた。そのため154人のアンケート回答者は、高齢者と女性に偏っているものの、次のような結果が得られた。

- ・一人暮らしと答えた32人全員が60歳以上。
- ・70歳以上の47人のうち、25人が一人暮らし。

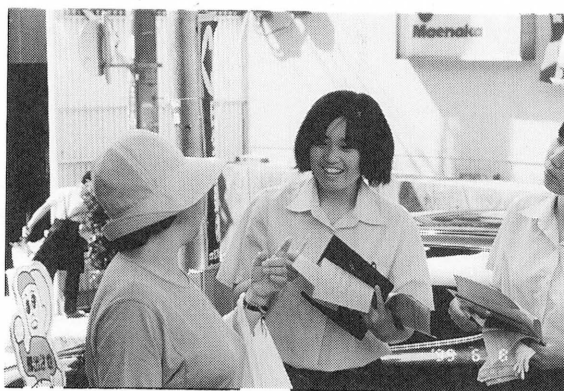


写真2 アンケート風景

アンケート実施中の生徒たちのようすを観察していると、特に高齢者の方々は、高校生との対話を楽しんでいるように見受けられた。このアンケートの実施により、生徒たちは、造成後30年以上経過した新興住宅地が抱える、高齢化の問題を実感することができたようである。その後の授業では、唐櫃団地の人口統計を検討し、高齢化の進行と一世帯当たりの員数の減少を確認した。

3. 授業実践の意義と課題

1) 意義—身近な地域の再評価

この実践がこれまでの地理の授業と異なる点は、第1には校外での調査活動を授業中に実施したこと（3時間）、第2には講師を外部から招いたこと（1時間）、第3には生徒の活動中心で授業を展開したこと（教師による講義の時間は28時間中5時間）である。このような思いきった単元を構成できた理由として、この授業が2年で地理を受講した生徒を対象とした3年選択科目として開講されたこと、受講生徒が27名と比較的少人数であったことがあげられる。生徒たちは、これまで経験したことのない授業スタイルにはじめは戸惑いながらも、おおむね積極的に授業に参加していた。1学期末の生徒の授業評価によると、調査活動に対する評価が高かった。そのうちのいくつかをあげる。

- ・よく知っている土地だけれど、よく調べながら歩くと知らなかったことがたくさんあった。
- ・フィールドワークではすごく観察力が身についたと思う。
- ・アンケートでは今まで思っていた唐櫃とは違う一面を見ることができた。

このように、生徒たちは、読図、フィールドワーク、文献調査など、「地域調査」のいくつかの方法を実際に試してみることで、新しい視点を獲得できた。

またフィールドワークやアンケートは、多

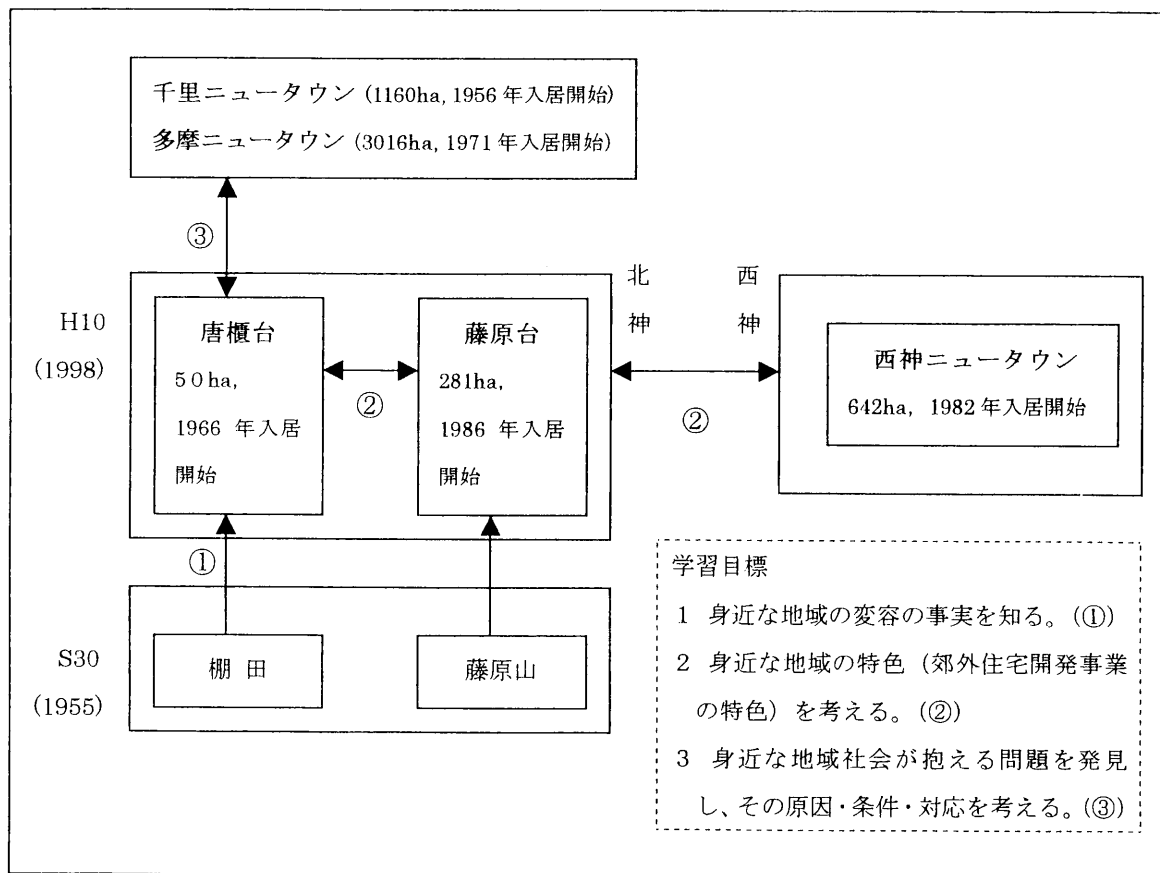
くの地域の方々の協力を得て実現した。小・中学校と異なり、地域との関係が希薄になりがちな高校において、教師・生徒ともに、地域社会の一員であることを再確認することができた。

2) 課題—知的好奇心に対応した授業を

しかし、この実践の内容構成についてはいくつかの問題点が残った。第1の問題点は、「目標設定」に関する点である。つまり、「高校地理における地域調査の目標」の設定が明確でなかった点である。はじめ、「棚田から団地へ」という、土地利用の変化の過程の探究を中心に授業を組織していた。同時にさまざまな調査の方法を知り、それらを「身近な地域の調査」で体験してみることを目標とした。しかし、調査が進むうちに、疑問が出てきたのである。この地域調査は、小学校の社会科で扱う単位とどこが異なるのだろうか。同じような調査活動は小学生でも可能ではないだろうか。ちょうどその頃、高校の向かいにある神戸市立唐櫃小学校で、地元住民への聞き取りを中心とした地域調査の研究授業がおこなわれた。授業の参観をしながら、その思いは決定的なものとなった。

第2の問題点は、「学習課題」に関する点である。つまり、調査過程で出てきた生徒の疑問に対し、十分に応えていなかった点である。たとえば、生徒から「なぜ唐櫃団地にはコンビニがないのか」という不満が授業中に言われた。このとき、この疑問をとらえて商業施設の立地について考えさせることもできた。しかし、そのことを掘り下げる時間を持たなかった。また、地域社会が抱える高齢化問題については若干取り上げたが、計画的に授業に組み込んでいなかったために、表面的な現象をとらえるにとどまってしまった。

以上のような成果を生かし、課題の反省を踏まえ、「身近な地域の調査」の単元計画の修正案を提案したい。



第2図 単元の学習過程の組織図

4. 「身近な地域の調査」の単元計画

1) 単元構成の原理—地域調査の目標

高校地理における「身近な地域の調査」の目標は、どこにおけばよいのだろうか。第2図は本単元の学習過程の組織図である。ここに示した3つの目標に基づいて、単元を構成した。

目標の第1は、地域調査によって身近な地域の変容の事実を知ることである（第2図の①）。調査方法として、新旧の地形図や航空写真の比較、フィールドワークを採用する。

多くの地域調査はこの段階にとどまっているのではないだろうか。そこで、本単元計画ではもう一歩進めて、さらに2つの目標を設

定した。

目標の第2は、調査対象地域を他の事例と比較し、そこから地域の差異や特色、関連などをとらえることである。本単元の場合は、郊外住宅開発の特色を考えることとした。そのためには次のような問いが考えられる。なぜ唐櫃団地の開発は、高度経済成長期におこなわれたのか。なぜ神戸市の住宅開発は、唐櫃団地を含む北神地区において積極的におこなわれたのか。また、同じ北神地区の開発でも、時期の違いは団地の規模や形態（道路の幅など）にどのように投影されているのだろうか。同じ神戸市内でも、北神地区の開発は西神地区の場合とどう違うのか、などである

(第2図の②)。これらの問いを探究するために、地図や写真の他、文献による調査を取り入れる。

目標の第3は、地域社会がかかえる問題を発見し、探究することである。たとえば、地域調査の結果、駅前の商店街の衰退が明らかになるのであれば、その原因を追求する。そ

して郊外型大型ショッピングセンターの出現と地元の商店街との関係に気づき、商業施設の立地と、人々の消費行動パターンについて考える。また、朝夕の道路や電車の混雑に対する住民の不満が多いならば、その実態を詳しく調査してみる。あるいは高齢化が明らかになるのであれば、将来の団地の年代別人口

第2表 「身近な地域の調査」の単元構成

	主な問い・学習活動	主な学習内容
導入 2 h	1 造成途中の唐櫃団地の航空写真を提示し、どのように地域は変容したのかを考えさせる。 2 地域調査の方法にはどのようなものがあるかを考えさせる。	1 唐櫃団地は、もとは棚田であった。 2 フィールドワーク、地図、航空写真、文献、聞き取りなどがあり、目的によって調査方法は異なる。
展開 ① 地域の変容 7 h	1 造成前と団地完成後の地形図と航空写真を比較し、変化していないところ、変化しているところを見つける。 2 <フィールドワークⅠ>唐櫃団地の地形を把握し、団地内に造成前の痕跡を見つける。 3 川より標高が高い棚田の農業用水を、どのようにして得ていたかを予想する。 4 地域の方の話を聞き、棚田時代のこの地域の景観と生活を知る。 5 <フィールドワークⅡ>下唐櫃を唐櫃団地と比較し、農村の景観の特徴を知る。	1 川、有馬街道、神戸電鉄、布土の森は変化していない。棚田が団地になった。唐櫃駅ができた。 2 唐櫃団地は2つの川にはさまれた段丘上にある。団地内には棚田の一部、農業用水路と取水口、墓地などが残っている。 3 川の上流から引いてきた水を高い田から低い田へ順番に落としていった。農業用水の管理は大切である。 4 唐櫃村は平地が少なかったため、棚田を利用してきた。林業が盛んな村であった。 5 団地が造成された間も、この地域では大きな変化はない。水田、寺、神社、水車小屋跡。
展開 ② 郊外に住	1 唐櫃団地を、同じ北神地区の藤原台と比較して、類似点と相異点を表であらわす。 2 北区にある他の団地の規模や立地を比較する。 3 北神地区の住宅団地と西神ニュータウンを比較する。	1 神戸電鉄の駅周辺に立地しているのは同じ。藤原台の方が規模が大きく、道路・諸施設が充実している。 2 神戸電鉄沿線に団地がある。成立時期が後になるほど大規模かつ市街地から離れていく。 3 西神ニュータウンは、地下鉄の延長を前提に開発された。大規模な開発である。西神工業

宅 開 発 の 特 色 4 h		団地に隣接している（職住接近）。大型商業施設がある。 ○高度経済成長期以降の都市人口の増加に伴い、郊外の住宅開発が進められた。 ○郊外の住宅開発は鉄道沿線に展開する。 既存の鉄道沿線に開発 → 鉄道の新設・延長計画と一体で計画される。 ○時代が下るとともに開発は大規模化し、街は多機能化する。 ベッドタウン → 大型商業施設、娯楽施設、工業団地、公共施設、高等教育機関（北区）などを併設
展 開 ③ 地 域 社 会 の 問 題 7 h	1 <フィールドワークⅢ>唐櫃団地の地域社会はどのような問題を抱えているかを調べる。 2 <アンケート>直接住民から地域社会の問題を聞く。 3 統計資料から人口ピラミッドをつくり、最近のニュータウン（西神）と唐櫃団地を比較する。 4 全国の成立 30 年以上経た住宅団地を取り上げ、同様の傾向がないか調べる。 （千里ニュータウン、多摩ニュータウン） ○ニュータウンは似た世代が一斉に入居するため、地域を構成する世代の多様性を欠く → 小・中学校の生徒数はピークを過ぎると減少。高齢化が一度に進行。 ○集合住宅の老朽化 → 公営の場合は財政難のため、また持ち家は所有者の合意を得るのが難しいため、改築が進まない。	1 高齢化の進行、高齢者の単身世帯の増加。朝夕の道路や電車の混雑。商店街の衰退。路上駐車が多い。 2 高齢者の人の中には通院・買い物などに不自由していたり、単身世帯でさみしく感じている人がいる。 3 開発されてすぐと、30 年後では街の人口構成が大きく異なる。 4 高齢化の他に、集合住宅や諸施設の老朽化が問題になっている。
終 結 2 h	1 高齢化問題に対し、唐櫃団地ではどのような取り組みがなされているかを調べる。	1 地域福祉センターでは、高齢者対象の催しや給食を行っている。それらの活動は老友会・婦人会など地域の人々が、行政の協力を得て運営している。

構成を予測し、地域社会で発生するであろう問題を予想する。これら地域社会の問題の探究に際しては、唐櫃台と同時期、もしくは古い時期に開発された、他の典型的な団地との比較をおこなう（第2図の③）。ここでは生徒たちは、これまでに学習してきたさまざまな調査方法を総合的に使って、探究活動を行うことになる。

2) 単元構成－新たな提案

第2表に本単元の授業構成（22時間）を示した。単元は導入、展開、終結の3つの部分で構成する。まず導入部では、地域調査の目的と方法について確認する。続く展開部では、先にあげた3つの単元目標にそって、学習活動を組織する。終結部はまとめとして、それぞれの問題に対して、地域社会はどのように対応しているかを学習する。

なお、展開部の③以降では、生徒の関心に応じて複数の問題の探究をおこなうことが可能である。しかし、紙幅の関係上、第2表においては特に高齢化問題に限定して、学習活動を通じて得られる学習内容を例示した。

5. おわりに

本稿では高校地理における「身近な地域の調査」の単元構成の原理と学習内容を提案した。

本単元は神戸北高等学校での実施を念頭に

において構想したが、もちろん他の高校でもそれぞれの立地条件に応じて応用することができる。1970年代以降に創立された高校は新たに開発された新興住宅地の中に立地することが多く、本単元とかなりの一致点があると思われる。創立が戦前にまで遡る高校の場合、校地が移動していることがよくある。その変遷をたどりながら、地域の変容を考察することができよう。中山間地域を校区に持つ高校の場合は、過疎問題や、道路交通網の整備が地域にどのような影響与えたかを考察することなどが考えられよう。

以上のように、校外での調査活動はそれ自体を目的としていては、生徒の認識は深まらないし、知的好奇心にも応えられない。地域調査は、地域社会の変容とその原因・社会的影響などの学習をおこなうための、問いを導く効果的な手段として、位置づけられるべきである。

主要参考文献

- 有野更生農業協同組合編(1988):『有野町誌』
- 神戸市立唐櫃小学校(1993):『唐櫃－唐櫃小学校120周年記念－』
- 田中眞吾編著(1984):『神戸の地理』．神戸新聞出版センター
- 日本計画行政学会(1992):『都市開発における公共と民間』．学陽書房

(いしかわてるこ・県立神戸北高等学校)